研究ノート

保育者の成長プロセスとリンクする現職教育・研修（第2報）

― コンサルテーションの役割 ―

井戸ゆかり　　内藤知美

In-service Training for Kindergarten Teachers and Nursery Teachers Connected with Professional Development Ⅱ
－The Role of Consultation－

Yukari Ido　　Tomomi Naito

要旨：

秋田（2000）[1]がヴァンダー・ヴェンのモデルをもとに保育者の発達段階を整理したものを参考とし、本研究では段階1（実習生を除いた、新任の段階とする）および段階2（初任の段階）の保育士を対象に、コンサルテーションの果たす役割を検討・考察した。その結果、保育者の成長プロセスにおいて保育の場を共有した後での定期的・継続的な現場巡回型コンサルテーションが効果的であること、研修型コンサルテーションにおいては講師が技術や情報を提供するだけでなく、グループ討議やロールプレイを取り入れることが効果的であること、それぞれのコンサルテーションでコンサルティである保育士にプラスのフィードバックをすることが保育士の自己肯定感や自信につながることが示唆された。

キーワード：

現職教育・研修　保育者の成長プロセス　新任・初任　コンサルテーション　プラスのフィードバック

1．研究の目的

保育･教育における現職教育･研修に対するニーズが高まっているのに比べ、保育者自身の成長プロセスにおける研究は少ない。第1報では保育者の資質向上に寄与する現職教育・研修システムの構築を目的に、その基礎研究として、現職教育・研修をめぐる動向および研修体系の構造を整理した。（内藤・井戸 2011）[2]

筆者らは、保育士研修・幼稚園教諭研修・園内研修講師、保育巡回指導員として保育実践や保育者に関わりつつ、保育者の成長プロセスとリンクする現職教育・研修のあり方を探究しているが[3)～4)]、今回の第2報では、保育現場における定期的・継続的なコンサルテーションや保育者研修が保育者（今回は保育士を対象とした）の成長プロセスにどのような影響があるのか、保育者の資質向上にどのような効果があるかを検討・考察することとした。

まず、コンサルテーションについて整理しておく。コンサルテーションとは、コンサルタント（本研究では心理士である保育巡回指導員や研修講師）がコンサルティ（本研究では保育士）に対し

て、子どもや保護者にかかわる際の具体的な方法、技法、計画などを助言・提供してコンサルティ（保育士）がクライアント（子どもや保護者）に直接的なかかわり（介入）をすることである。本研究では、コンサルテーションを2種類のタイプに分けて検討・考察していく。すなわち、一つのタイプは、保育現場において子どもに問題が生じた時にそれを解決したり、障害児・グレーゾーンの子どものかかわりへの助言を主な目的として行うものであり、「現場巡回型コンサルテーション」と呼ぶ。もう一つのタイプは、園内研修や保育士研修などを通して保育士に子どもや保護者に対する支援方法、進め方、留意点などについて研修を通して行うものであり、「研修型コンサルテーション」と呼ぶ。

2．方法

2004年4月より本研究の研究者（井戸）は都内にある複数の保育所において、心理士（保育巡回指導員）として1園ごとに毎月1回定期的・継続的にコンサルテーションを行っている。コンサルテーションは、午前9時30分頃から13時30分頃まで保育の場を共有し、その後保育士にコンサルテーションを行うという形である。

「現場巡回型コンサルテーション」を通し、コンサルタント（保育巡回指導員）に相談や助言を求めるコンサルティ（保育士）の経過および、コンサルテーションを受けた後の聞き取りから、コンサルテーションがもたらす保育者の成長プロセスへの影響、保育士の資質向上への効果について検討・考察を行った。

また、「研修型コンサルテーション」としては、自治体主催の「保育士専門研修」（初任者対象）を受講した35名の研修（2011年2月実施）後の感想（自由記述）から分析・考察した。

なお、検討にあたっては、秋田（2000）[1]がヴァンダー・ヴェンのモデルをもとに保育者の発達段階を整理したものを参考とし、今回は段階1（本研究では実習生を除き、新任の段階とする）および段階2（初任の段階）を対象とした。

3．結果

（1）現場巡回型コンサルテーション

1）コンサルティである保育士の段階の特徴と課題

保育士とのコンサルテーションを通し、コンサルティとなった保育士から得られた特徴と課題については、秋田（2000）[1]の「保育者の発達段階モデル」を基本に、検討を加えた。

まず、段階1（新任の段階）の特徴として、「子どもとのかかわりの楽しさや新しい発見への喜び、学生時代の実習やボランティア経験と実際の保育士という仕事のギャップ（保育技術の未熟さ、保護者対応や気になる子どもとのかかわりの難しさ、全体を見られない難しさ）」などを感じやすいことがあげられる。そして、先輩保育士の姿や園長・主任などの助言を通して自分なりに問題を解決し、保育士として前向きに取り組んでいこうと思いつつも、「もしかしたら保育士に向かないかもしれない」という不安を抱きやすい時期でもあることがわかった。課題としては、「子どもをとらえる時の読み取りが適切であったか、保護者への対応が適切であったかなど客観的に自己省察することの難しさ」があった。

次に段階2（初任の段階）における特徴として、「実習生や新任保育士を迎える立場を自覚するようになる、子どもとかかわる楽しさや仕事への意欲・自信が感じられる一方で自分の保育がこれでよいのか悩み、誰かに見てもらいたい、確かめたい」という時期であることがわかった。言い換えると、この時期は、保育士としての役割意識が高まり、子どもとかかわる楽しさや仕事への意欲・

自信が感じられる反面、保育士としての役割を十分に果たしているか、子どもや保護者へ対応が適切であったかなど自らの力量や自身の存在価値について不安をもつなどプラスとマイナス両面からの心の揺らぎが見られた。課題としては、自身の保育に対する自信の揺らぎや保育士としての社会的役割を含んだ存在価値への疑問、自己肯定感の欠如があった。

2）コンサルテーションでの留意点と保育士の変化

段階1におけるコンサルテーションでは、多角的な視点や見通しをもつことがまだ難しく、「保育士に向いていないのではという不安」を抱き辞めたいと思うことがある時期であったため、まず、保育士の不安や悩みを受容し、保育士が自身の「よさ」に目が向けられるよう肯定的な言葉かけを心がけた。また、「保育技術の未熟さや、保育の見通しをもてずにいる場合や手さぐりで保育をしている状態がある場合」には、その日の保育やそれまでの保育を振り返りながら一緒に問題点を考え、丁寧に整理する作業を行い、助言を行った。その結果、コンサルタント（心理士である保育巡回指導員）が保育の場を共有していることでコンサルティである保育士にとって状況や悩みが伝わりやすく、コンサルタントもより正確に状況を把握することができた。ゆえに、保育士はより適切な助言を受けることができ、疑問もその場で解決されることが多いため、保育士の問題点や課題の解決に効果があることがわかった。また、保育の見通しがもてることにもつながり、客観的に自己を省察し、翌日からの保育に生かしていくことができること、専門家（心理士としての保育巡回指導員）が保育の場を共有し一緒に問題点や課題を考え、助言を受けることで安心感を得ることができるということだった。

段階2は保育士としての「意欲や自信が出てくる中で、その役割を十分に果たしているか、自身の保育はこれでよいのか誰かに見てもらいたい（確かめたい）」という気持ちをもっている保育士が多く、プラスとマイナス両面の心の揺らぎが見られるため、その揺らぎを受け止め、その日の保育の振り返りを行い、今後の課題を助言した。保育士は自身の保育が観察されることで、「あの時の子どもへの対応は適切だったのか」「子どもへの介入の仕方や言葉かけは適切だったか」をコンサルタントに直接尋ね確かめることができ、コンサルテーションを通して保育士がもっていた疑問や課題を具体的に解決することができると述べていた。

そして、毎月1回定期的・継続的にコンサルテーションを受けることが可能なので、次の1か月までの間に自身の保育を客観的に省察し、疑問や課題を整理し、コンサルテーション時に確認するという姿が見られるようになった。段階2は、自身の保育への自信の揺らぎ、保育士という社会的役割を含んだ自身への存在価値への疑問、自己肯定感の欠如が見られる時期である。コンサルテーションにより自身の保育を他者と共有して振りかえることで確認・修正しながら、自分の「よさ」にも目を向けることができるようになり、自己肯定感につながることが多かった。

（2）研修型コンサルテーション

35名の初任者を対象に、主に保護者支援（相談援助）について保育士専門研修（2011年2月実施）を行った際の自由記述による感想を分析した。研修は、①相談援助技術の具体的な方法、②グループ討議（事例についての具体的な支援方法を話し合う、相談援助のロールプレイ、研修講師からの講評）を主な柱とする6時間の研修であった。加えて研修では、グレーゾーンの子どもへのかかわり方、保護者に伝えてほしいこと（幼児期に何を育てておきたいか、子どもとの日常の

かかわり方など）や、自身を知ることも他者への理解や他者を支援する時に大切であるため、自身を知る方法に関する演習を行った。

自由記述による回答は以下のとおりである。（一人で複数の記述回答しているものは、内容別に分けて記載した）

1）相談援助技術の講義を通して

a）保護者対応

①保育に対しての知識、相談援助技術をよく理解することができ、すぐに実践に生かしていきたい。（11名）

②現場にあった内容（実践にあった内容）でわかりやすく、具体的な方法について知ることができ、明日から実践してみよう・すぐに実践できると思った。（12名）

③具体的な例をあげての説明だったのでイメージしやすくわかりやすかった。（8名）

④保護者対応に難しさを感じていたが、保護者対応についてのポイントがとてもわかりやすかった。（3名）

⑤これまで実践してきたことが間違っていなかったと安心した反面、「これを言ってしまっている」と反省し、これから十分配慮していこうとあらためて思った。

⑥保護者に伝えることばかりを考えていたが、保護者によって受け止め方が違うこと、話していることと心の中で思っていることは違うことがあるという点で、もっと相手の表情や話し方にも注意しなくてはならないと思い、よく観察することが大事だと感じた。また、自分自身についても、自己肯定感を高めたいと感じた。

⑦何気ない保護者との会話を通しても、信頼関係を築く第一歩になるのだと感じることができた。

⑧相談支援を行う上での留意点は、あらためて保護者と話す時のポイントを再確認できてよかった。園に戻って実践していきたい。

⑨日頃から保護者の方の立場に立った対応を…と心がけているがあらためて考えるよい機会となった。

⑩なんとなくこうした方がよいかなと思いながらやっていたことが、論理的にあっていたと確認できたり、改善したほうがいいと考えさせられるところもありよかった。

⑪日頃から感じている保護者対応について、研修を通してとても知識が深まり、現場で具体化できるように努力していきたいと思う。

⑫子育て経験のない私でも、保護者の気持ちや対応について具体的でわかりやすかったので、どこに気をつけ目を向けていったらよいかよく理解できた。そして、学んだことをそのまま実行できるかは自信はないが、意識しながら子どもや保護者とかかわっていけたらと思う。

⑬保護者との信頼関係の築き方では、今まで意識できていなかったところもあり、これから意識していきたいと思う。

⑭保護者対応の難しさを感じながらも少しでも共感できたらよいと思った。

b）その他

①日頃の保育をふりかえるよい機会となった。（3名）

②自身を知る（自身をふりかえる）きっかけとなり、今後の人生の参考にしたい。

③なんとなくわかっていたことが、研修によって整理されたので、実践できるよう日々積み重ねていきたい。

④日常行っていることを再度見直すことができ、確認する機会がもててよかった。

⑤保護者に伝えてほしいこと（幼児期に育ててておきたいこと、子どもとのかかわり方など）については、クラス懇談会などを通して資料を活用し伝えていきたい。（9名）

⑥講師が母親の気持ち、実体験をふまえながら話していたのでわかりやすく定着しやすかった。

⑦カウンセリングマインドと保育の深いつながりがわかった。

⑧いつも身近に感じていた問題や自分のもっている問題点をふりかえりながら聞けてよかった。

2）グループ討議（ロールプレイ、事例についてのディスカッションなどの演習を含む）

グループ討議について、研修内容を理解するために効果的であったかどうかを4段階評価で尋ねてところ、35名中、大変効果的であった（4段階評価の4）とした者が33名(94%)、効果的であった（4段階評価の3）とした者が2名、効果的でなかったとする者はゼロであり、受講者全員が効果的であったと回答していた。

自由記述による回答は以下のとおりである。

①事例について話し合い、他の保育士のいろいろな考え方や対応を知ることができ勉強になった。(20名)

②実際に経験した事もあったが、さらに、これから起きそうな（ありそうな）事例や、まだ経験したことのない事例についても他の保育士の意見を聞け視野が広がった。(4名)

③同じ考えをもっている人も多いことがわかり、自信をもつことができた。（4名）

④事例についての話し合いの中で、意見交換をするうちに問題点を客観的に考えることができよかった。（3名）

⑤事例を共有し、それぞれが自由に意見交換でき、そのあとに講師がそれに対して適切な助言をしてくれ確認ができ勉強になった。（3名）

⑥他の園や自治体での対応を知ることができ、参考にしたいと思った。

⑦ロールプレイについては、日ごろ、他の保育士が具体的にどのような保護者対応をしているのかあまり見る機会がないので、どのようにしたらよいのか勉強になった。（3名）

⑧ロールプレイで実際にやってみると難しさも感じたが、具体的に対応方法を確認できてよかった。

＊（　）内は人数、（　）が無いものは1名を示している。

4．考察

（1）定期的・継続的な現場巡回型コンサルテーションの役割と効果

保育の場を共有した後でのコンサルテーションは、保育実践の支援、保育士と保護者のパートナーシップへの援助、専門機関への連携等があるが、保育の場を共有することで保育士のニーズをより的確に捉えることができると考えられる。

多くの自治体で保育巡回指導の制度を設けているが、年に数回の巡回ということが多い。しかし、本研究のケースでは、毎月1回「定期的・継続的」という特色があり、その効果として、定期的に自身の保育を確認でき、保育士が、子ども理解や保育行為を能動的に意味づけ、PDCAサイクルを身につけることにつながっていると考えられる。年数回のコンサルテーションを受けている保育士たちへのインタビューでは、まったくコンサルテーションが行われないよりはコンサルテーションを受けられることは歓迎するが、年数回ということで必要な時に適切な助言を受けられないことが多いことをあげていたことから、自身の保育を

省察する意味でも、子どもの発達の過程を見ながら適切なかかわりを考えていく意味でも、1か月というスパンでの定期的・継続的なコンサルテーションの効果は大きいと考える。

コンサルタントが保育の場を共有する場合、保育士によってはコンサルタントの目が気になることもあり得る。したがって、コンサルタントと保育士の信頼関係を大切にしながら、コンサルタントも保育の邪魔にならないように観察をし、保育士や子どもたちが普段のように過ごせるようにすることが大切である。それらが保障された上でのコンサルタントが保育の場を共有するということは、コンサルテーションの時に保育士はより正確に状況や悩みを伝えることができ、コンサルタントもより適切に問題を整理し助言することができると思われる。具体的には、その日の保育の中での疑問や不安、保育のずれをその日のうちに解決・修正し、翌日からの保育に生かせ、保育士も自身の保育がこれでよいのかということをそこで確かめている場合もある。

そして、「保育士に向かないかもしれない」という不安を抱きやすい段階1、「自分の保育がこれでよいのか悩み誰かに見てもらいたい、確かめたい」とする段階2において、保育士が自己肯定感をもてるように、コンサルテーションの中で、保育士が自身の「よさ」に気づくように「プラスのフィードバック」をしていくことは大事な役割の一つだと考える。保育士が自分の「よさ」に気づき自己肯定感をもつことは、保育士としての成長、資質向上につながると考えられるからである。

前述したように、外部の専門家が保育の現場に入ることは、その入り方によっては、日常の保育、すなわち子どもや保育士に何らかの影響を与えることはあり得ると言える。いかに、保育の現場に携わる人たちと信頼関係を築けるか、日常の保育を保障しながらどのように観察をするかなどの課題もある。本研究では、本研究者が2004年4月から定期的・継続的に同じ保育現場に入っているためその間に構築された信頼関係があり、園長も保育士もコンサルテーションの効果を感じ、コンサルテーションが定着していることも大きいと考えられ、定期的・継続的ということもコンサルテーションの効果として一つの要因になったと思われる。

（2）研修型コンサルテーションの効果

初任者を対象とした主に保護者対応についての研修であったが、相談援助技術の習得、日ごろの自分の保育への省察、保護者へのかかわり方の再確認の場となったと思われる。講師が相談援助技術の提供ばかりでなく、保育の場で実際に起こりうる事例や起こりそうな事例を提示し、具体的な援助方法を示すことは、研修受講者の理解を深めることになり、「すぐに実践に生かしていきたい」「明日から実践してみよう」「イメージしやすくわかりやすい」という感想につながったと考えられる。したがって、相談援助技術ばかりでなく、いかにコンサルタントである講師が保育の現場をよく知っており、現場に生かすことができる技術や情報を提供できるかということが大切だと考える。

現在は保護者も家庭も多様であり、障害児やグレーゾーンの子どもばかりでなく健常児をもつ子どもの保護者に対しての対応に難しさを感じる場合も多い。子どもとのかかわりがあまり上手でない保護者や、保護者の価値観優先の生活リズムなどが子どもに与える影響は大きく、それらを保護者に伝えたいと思っても、新任、初任の段階ではなかなか適切に言語化して伝えることが難しいこともある。そこで、研修時に配布した保護者に伝えてほしいことという資料を活用したいと記載していた保育士が9名いたが、保護者会やクラスだよりなどを通して、研修の講師から得た情報として

資料を示したり、それを参考に話をすることも一つの方法かと思う。

また、受講生全員が研修内でグループ討議をすることは効果的であったと感じており、グループ討議は同じ事例を共有しながら他の保育士のさまざまな考えや対応を知ることができ、有効であると言えるだろう。中には、「この対応でよいのだろうか…」と思っていたが、他の保育士も同様な対応をしていることを聞き、安心や自信につながった場合もあった。ロールプレイについてはそれ自体についての質問項目の設定はなく、グループ討議について質問した中に記述があったものである。日ごろ、他の保育士がどのように保護者対応をしているのか実際に見る機会があまりないので、ロールプレイをすることで保護者の気持ちの理解につながったり、他の保育士の対応を参考にしながら自身の対応の学びとなったものと考える。（ロールプレイについては、保護者対応にかかわらず、子どもへの対応に関しても、他の園内研修などの感想でも日ごろの保育で同僚の対応をじっくり見る機会がなく、自身の保育や保護者対応を見直すのによいというものが寄せられていた）つまり、「モデリング」を必要とし、その重要性が言えるのではないだろうか。

段階2における初任者は、「子どもとかかわる楽しさや仕事への意欲・自信が感じられる一方で自分の保育がこれでよいのか悩み誰かに見てもらいたい、確かめたい」「保護者への対応が適切であったかなど自らの力量や自身の存在価値について不安をもつ」時期でもあり、グループ討議は自身と同じ段階に位置する初任者の考えや対応を知り、悩みを共有できる場であるとともに、省察や自信にもつながり、大きな効果が得られると考える。コンサルタントである保育巡回指導員や研修講師の果たす役割も大きいと思われるが、同じ初任者同士が園を超えて問題点を共有し話し合えるグループ討議や、ロールプレイの機会を作ることも大切だと言えるであろう。

5．今後の課題

本研究においては、調査対象となる段階1（実習生を除く新任者）の対象者となる人が少なく、研修においても段階2(初任者のみ)の研修に絞ったため、調査対象者数が限られてしまったため、今後は調査対象者数を増やし検討していきたい。

段階3は質的変化が生じると推察される。したがって、段階3以降については、さらにステージモデルと保育士によるライフストーリーに目を向け、それらを合わせて検討していきたいと考える。

そして、今後、保育者には園内の問題解決、保護者とのパートナーシップ、職員間の調整、必要に応じた外部との連携等への調整役となるコーディネーター的役割がますます求められると示唆され、その力を養成するための現職教育・研修のあり方も含めて検討・見直したいと思う。

引用・参考文献）

1) 秋田喜代美（2000）「保育者のライフステージの危機」『発達』83 ミネルヴァ書房
2) 内藤知美・井戸ゆかり（2011）保育者の成長プロセスとリンクする現職教育・研修 －現職教育・研修の動向について－ 東京都市大学人間科学部紀要 2
3) 井戸ゆかり・内藤知美（2010）「保育者の資質向上と現職教育（3）－コンサルテーションの役割」日本保育学会第 62 回大会論文集
4) 井戸ゆかり・内藤知美（2010）「保育者の成長を支える現職教育（2）－コンサルテーション事例からの検討」全国保育士養成協議会第 49 回研究発表論文集

〈本研究は、科学研究費補助金による基盤研究（C）研究課題番号 22530878 の研究の一部である〉